この種の書物は、写本で流布するものの方に、遠慮や控えめな発言が圧倒的に多く見られ、文学史研究のうえで好資料となる。特に江戸時代の書物は、詳細を含むものが多く、研究者の手本となる。この点を考慮に入れると、写本の内文が書物の一部であり、書き手の意図をより明確に捉えることができる。
一宮田 時の詩人集を数多く刊行した点である。正徳元年（1711年）の朝鮮旅行の帰国の道上、一宮田は『新刊白石』を刊行し、その詩人集を『新刊白石詩草』（二巻）とし、併せて『東京詠花集』の編集を着手した。この時期に、一宮田の詩人集は、従来の規模を大きく超えたものであり、新たな詩人集の形を模索する動きが見受けられる。

しかし、一部では、その詩人集が単なる表紙の見本にすぎず、内容的には乏しいものであると見られることもあった。これらの問題を解決するため、一宮田は、従来の詩人集とは異なる形での出版を目指し、新たな詩人集の形を模索する動きが見受けられる。

一方で、一宮田の詩人集は、従来の規模を大きく超えたものであり、新たな詩人集の形を模索する動きが見受けられる。この時期に、一宮田の詩人集は、従来の規模を大きく超えたものであり、新たな詩人集の形を模索する動きが見受けられる。
三

「筧山」を「麻」の意で、松平朝臣の麻布邸に住んだことによる。静斎の別号である。書名の「広海人」は「検討」の意で、まじめな内容を含むという意味がある。

第一に、『山林記』、写本四冊。静斎の詩文集である。本書の名は、『採要録』の性格をも見定めておくこととしたい。
図 1  関口黄河編『案書唐詩選五言絶句』(案条二年序刊一冊) 河口静斎序部分

第一段: 本編は、案条二年序刊一冊の『案書唐詩選五言絶句』を基に、関口黄河の美文をもとに作られたものである。関口黄河は、日本の中世文学においての重要な人物として知られている。

第二段: 本編は、静斎が與してのものであり、静斎らが作詞を含む五言絶句の選集である。静斎は、特に五言絶句に深い関心を寄せ、本編の作成に寄与している。

第三段: 本編の選詩は、静斎らの美文を基礎に、関口黄河の美文をもとに作られたものである。静斎らの作詞が、特に五言絶句に優れているため、本編は、それらをもとに作られたものである。

第四段: 本編は、特に五言絶句に優れているため、その美文性を楽しむ読者に最適である。関口黄河の美文をもとに作られたことから、読者は、関口黄河の美文を深く理解することができる。

第五段: 本編は、特に五言絶句に優れているため、その美文性を楽しむ読者に最適である。関口黄河の美文をもとに作られたことから、読者は、関口黄河の美文を深く理解することができる。
政経に同じく「中庸黙記」の蔵書印がある。構成は春、秋冬の四集に分かった写本四冊。夏集の冊は、表紙の糊付けがあまない、一枚下にある共紙の原表紙が見える様にめくれる箇所があり、そこに「博聞録」にという文字が見える。当時はこの名で呼ばれたのである。尾に、直隷の儒者程邦長安によって宝暦六年八月既望、漢文で書いた跋文が付されており、宝暦六年は静穂次二年目にある。

それに聞く、筆者が直隷公は、静穂先生の名を聞き、長く間面を得たく思っていた。そこで筆者が静穂公を呼びになり、「新記孟子」を講じた後に、講員分をEmpresaにおり、酒をくみ、詩を詠んで親交を深めた。つねに末席にあたった私は、先生の語るところにあれば筆をとり書き留めていたが、近延三年より宝暦三年の間で、それが相当の分量をなしていたが、先生の亡くなった間、直隷公の賢を求める意を認め、静穂先生の遺道を広めるとすると志があまなく推進をしなければならないことが知られている。この書は『永経録』に語り、静穂先生の語りを録すを以って、長螺を記す。蓋し、静穂先生の語録の類なりと云うように、本書は『語録』と呼ぶのがもっとも相応し、専門的な意味で静穂の著述とは言えない。河口静穂述、筆長螺筆録とするのが適切であろう。漢字点仮名二部、平仮名交りで書き止められた静穂の話は、

図2 『永経録』（極徳稲荷神社博物館蔵写本四冊）春冊冒頭部分
大庭：江戸時代漢学者の「語録」とその周辺

九余条をたどる。話柄は、和漢の学術から近代人の造語まで方
般におよび、文字化した多彩である。長髪の魅力により伝えられ
た、これら語の集積は、ただに、著者の多くらえ靜斎の学術と
文芸を考える好個の資料であるだけでなく、以下の諸点のうえに
も意義が認められるだろう。好学の大名が学者を招く例が多くあるが、その際、い
なる知識が求められ、与えられていたのか。静斎は漢学の師とし
て直郷に招かれているかという、本書には漢学以外の話の方
がむしろ多く書き留められている。本書につくことで、大名の学
芸受容のありかたが、また当時の漢学者の果たしていた役割が
つぶさに知られるであろう。

次に、本書をむだとくことは、「漢学、すなわち儒学という学問
の歴史を再認識するうえで有効である。格物観念、格物観
念思想を日常的に実践すれば、自然、耳目をふるう
理」という哲学と同義にとらえ、日常における必要
性は、除去に解決されつつある一方、漢学者たちの事実を研究の
対象とするために、一枚の連感を覚える傾向が史学史的に
依然として見出されるもの。こうした認識の延長線上にあ
る問題である。直郷のように好学で大名が、静斎の話により知識
を満たしたといった一事件、当時の文化や生活のなかに儒
学がどのように配るか、そして定着していたのかを考えるうえ
で、やはり大きなの唆を与えるものではないばならない。

さらに本書は、新旧の交代が著しい正徳、享保文壇を物語る証
言として貴重である。静斎の時代の江戸文壇は、木間、荻生徂
徠の古文辞学派が江戸に興り、新旧勢力と並立する文壇の下で「教師
派の人々の言説や雅を集めて写本で行われるものに、徳和未詳の
「談譚雑言」とも呼ばれ、その体裁をなす、文学史上の位置づけがいちど不
充分とされる木間を考える資料としても、本書の価値は大きいと
言わなければなるまい。

以上、錦鶴直郷の旧蔵書中に見える静斎の著述を概見して、そ
れらのうちでも「談譚雑言」が多くとも内容に富むものであるとい
うことを述べ来た。いま、少しその内容に立ち入るべきで
あろう。

四
大庭：江戸時代漢学者の「語録」とその周辺

この書は同様の二面白く、専門性があることを評価し、そして同じ文脈のなかで、「哥八人情ヲナル物ヲナベ」と、和歌の本質は人情の発表にある点が述べられている。

【増重年二月冊】/漢文の序を挙げた、俳謡集に熱中する文集が書き留められた。芭蕉の角に俳謡を学んだ「石静説謡」にその名が見られ、また「秋筆録」には、静説からの難題として、菅原文に付會旅があった人物がある。「芭蕉の」が書き留められたこと、俳謡に関する話が散見されるのも、芭蕉とその角の墓碑と、芭蕉の句を彫った絵画の里もない。春に見ることができる別の一冊に、芭蕉と静説との関係を語る。本が挙げた、静説の考証、静説の考証、静説の考証、静説の考証、静説の考証、静説の考証、静説の考証、静説の考証、静説の考証、静説の考証。
久留米大学文学部紀要国際文化学科編第26号

心の深さがよく表れている。句の鑑賞にまで踏み込んだ話も本書には散見しており、

○ 買ってゆか十六の風車

淡々江流へ下りて帰り上る時ノ句也。是八、司馬相如ガ

○ 頃日、人ノシナル句トテ、静穏見せセルノ。句ノ左の

この日、人々ノシナル句トテ、静穏見せセルノ。句ノ左

○ 京師ト、俳諧トモニ、トカク山林幽隠ノ体ナラデ出来ズ。

京師ト、俳諧トモニ、トカク山林幽隠ノ体ナラデ出来ズ。

豪傑花麗気、絶テナシ。朝廷ノ衰微故、人心モリタヌ

豪傑花麗気、絶テナシ。朝廷ノ衰微故、人心モリタヌ

院見夕リ。江戸ノ者ハ、メツボニ不敵コトヲ云出す也。

院見夕リ。江戸ノ者ハ、メツボニ不敵コトヲ云出す也。

○ 京都ノ詩ト俳諧ノ作風ガ「山林幽隠ノ体ナラデ」であるのは、朝廷ノ衰

京都ノ詩ト俳諧ノ作風ガ「山林幽隠ノ体ナラデ」であるのは、朝廷ノ衰

豪傑花麗気ト俳諧ノ作風ガ「山林幽隠ノ体ナク」であるのは、朝廷ノ衰

豪傑花麗気ト俳諧ノ作風ガ「山林幽隠ノ体ナク」であるのは、朝廷ノ衰

退して人々ノ心も奮い立たぬためであり、対するに、江戸ノ幕府

退して人々ノ心も奮い立たぬためであり、対するに、江戸ノ幕府

を揺して力があるから、その作風ガ「豪傑花麗ノ気ナリ」があり、

を揺して力があるから、その作風ガ「豪傑花麗ノ気ナリ」があり、

「メツボニ不敵ノ気味ナリ」と言える。例えば、「京都ノ石川山

「メツボニ不敵ノ気味ナリ」と言える。例えば、「京都ノ石川山

波ノ隠れの愛と詩の中に、江戸ノ観生族粋ノ盛唐詩ノ範モデルノ詩を

波ノ隠れの愛と詩の中に、江戸ノ観生族粋ノ盛唐詩ノ範モデルノ詩を

思い浮かべれば、静穏ノ言うところはおのずから明らかナール

思い浮かべれば、静穏ノ言うところはおのずから明らかナール

もしかするとこの条は、京都ニ江戸ノ詩ノ風流の違いを、わかり易く

もしかするとこの条は、京都ニ江戸ノ詩ノ風流の違いを、わかり易く

俳諧ヲ例として説いたものであったか知れない。

俳諧ヲ例として説いたものであったか知れない。

五

次に、『秉筆録』の中に話ヲ拾いつつ、正徳、享保文壇ヲ顧みる

次に、『秉筆録』の中に話ヲ拾いつつ、正徳、享保文壇ヲ顧みる

こととする。

こととする。

静穏ノ「波ノ潮源流ヲ批判的に言及していたように、観生族粋

静穏ノ「波ノ潮源流ヲ批判的に言及していたように、観生族粋

を盟主とする古文辞学派ヲ破壊的な言説ヲ学界ヲ驚かせ、当代

を盟主とする古文辞学派ヲ破壊的な言説ヲ学界ヲ驚かせ、当代

の人々にとって注視の的であった。『秉筆録』においては、静穏

の人々にとって注視の的であった。『秉筆録』においては、静穏

ハより一層雄弁ニ、俳諧ヲ評価ヲ語っている。その若千ヲ次ニ掲

ハより一層雄弁ニ、俳諧ヲ評価ヲ語っている。その若千ヲ次ニ掲
大庭：江戸時代漢学者の「語録」とその周辺

○鶴生秘書門：『聖人九等論』アラバストコ

○江戸風俗：新奇万キモ内役

○江戸風俗：新奇万キモ内役

○江戸風俗：新奇万キモ内役

○江戸風俗：新奇万キモ内役
から聞いたかと思われる。水戸彰文館の儒者たる書斎は、山崎開業らが
門派の人々の話などもそれぞれに面白く、ひょんな学芸評論集を
編めるほどの分量をなすが、すべてを俺が書けるわけにはいかない。

ここでは、春集に見られる、本門の人々を紹介する考えを示して、
足らずの点を少しでも補っておく。

○観瀬　三宅九郎　其子岩次郎云。今、甲州二里。

○綿里　木下純庵也。鈴工小路二郎。元来、京師師來新。

京三島数アリテ、加賀侯在国ノ時八、加賀ニテハ、在府ノ
時ハ、京師ニケテ居居シテハ。

○田伯譲　増田助衛門。白門門弟。詩人也。天徳丁丑三月
香豊山房板アリ。鶴ト雲テ、目観冒ヲナリ。ソレ故、鶴橋ト
号ス。大久保山城守此ノノ弟ニテ、鶴橋余稿ト云フ蘭亭
ノアメシニ。今、大久保家ニ雲リ。此橋楼、詩ハヨドヨ
クツククレリ。夫故、詩モノ多ハ。八月十五夜八、降オテ照テ

又、中秋ニハ、白石、御近習ニレラレツア、鳴泉ノナド鴨天
ノ時、コハリヘハ。駕馬カチカチヘ、中秋会ヲセラ

これらは、近接して列挙されている。おそらくは直郷の求める応
じて、自分の流れを紹介したものであろう。木門の複雑の広がり、
それを作成する人々の経験を知るうえでも有益である。秋集に、

○思聡　南極宗。加賀富山侯松平大蔵大輔。（二里）

○西山順泰　阿比留順泰。対馬人。阿比留太郎八ト別名ナ

これらは、近接して列挙されている。おそらくは直郷の求める応
じて、自分の流れを紹介したるものであろう。木門の複雑の広がり、
それを作成する人々の経験を知るうえでも有益である。秋集に、

○頌卿　松浦儀右衛門。対馬。

○茂松　白石、御近習ニレラレツア、鳴泉ノナド鴨天
ノ時、コハリヘハ。駕馬カチカチヘ、中秋会ヲセラ

最後に、春集で静穏が紹介する木門の人々のうたでも、せふ筆

○茂松　松浦儀右衛門。対馬。

もれば、静穏が直郷と交際をもっていった。芳洲はまだ存

命であった。それとは明記せぬ場合もあるが、朝鮮通信使の様々
なエピソードや、対馬および朝鮮の細やかな習俗、李氏朝鮮が設

伊知事　先祖長門ノ人。伊東真右衛門。親ノ代ヨリ江名ニ

集大興　阿波内。集堂直衛門。

○茂松　松浦儀右衛門。対馬。

○茂松　白石、御近習ニレラレツア、鳴泉ノナド鴨天
ノ時、コハリヘハ。駕馬カチカチヘ、中秋会ヲセラ

而言うように、静穏が直郷と交際をもっていった。芳洲はまだ存

命であった。それとは明記せぬ場合もあるが、朝鮮通信使の様々
のエピソードや、対馬および朝鮮の細やかな習俗、李氏朝鮮が設

伊知事　先祖長門ノ人。伊東真右衛門。親ノ代ヨリ江名ニ
久留米大学文学部紀要国際文化学科編第26号

六

『東筆録』は先述のとおり、静斎の没後に、その学徳を偲んで、鍋島直良とその儒臣、一郎長等によって編まれた。現時点では、直良の蔵書中に遺伝本のないところを知りつつ、その読みは、おそらく『東筆録』と同種の書物にせえ、刊行されてであろう。しかし、その者は、お而らの書体をとった方針を設けたものである。『東筆録』の集めは直良の遺物に限定される。刊行されると、広く人々に示されたとと思われるものに、『東筆録』は別冊の別集に於て、弘化、嘉永、維新、明治の刊行を経て、和歌、和文作品を集める四十冊を正経として、静斎の随筆を集める十一冊を別集に配される。

中味を見ると、和文で書きかれた割に十六条の記事のなかに、鴻巣や観瞻、芳寱からの直談が散見して、『東筆録』と相似するが、話柄は重なりあっていて重ならない。『静斎随筆』は、別集の第二に配される。

『静斎随筆』は、『静斎随筆』の『静斎隨筆』について注目すべきことは、杏花園大田南総の筆写にかかる。本を底本に使用された南総の随筆を編集したものである。南総の随筆を編集したものが、『静斎隨筆』である。しかしながら、南総の随筆を編集したものが、『静斎隨筆』である。南総の随筆を編集したものが、『静斎隨筆』である。南総の随筆を編集したものを、『静斎隨筆』と呼称される。

「読書」がそのまま版刻されている。讃語に見えるる鈴木白藤家事は、南総の随筆を編集したものである。南総の随筆を編集したものが、『静斎隨筆』である。南総の随筆を編集したものを、『静斎隨筆』と呼称される。

『東筆録』は、『静斎隨筆』と『静斎隨筆』の一点を収めるに軸を構えている。静斎の随筆を編集したものが、『静斎隨筆』である。南総の随筆を編集したものを、『静斎隨筆』と呼称される。

『東筆録』は、『静斎隨筆』と『静斎隨筆』の一点を収めるに軸を構えている。静斎の随筆を編集したものが、『静斎隨筆』である。南総の随筆を編集したものを、『静斎隨筆』と呼称される。
許されるが、本書は、日本随筆大成（新版第一期十七巻）に由来する。本書の全構成が、武家の行実、世俗の趣味、近世初期版行の書物、仮名草子類の評価など、目立つことに、静観の随筆にくらべると、學問的な記述はいたって少なくなって、筆者の見解を何と感じしても、内容は豊富である。正路が意識したかいないかは別としても、文学史のうえでは木鼻の人々の随筆の系譜に、かくかに連なるものと言えよう。

注

① 森鈴三著作集（中央公論社、昭和46）第十一巻所収。
② 中村春彦訳文集（中央公論社、昭和58）第十三巻所収。
③ 國外文学談（めぐる資料、平33）所収。
④ 九州資料叢書「益軒資料」六（九州史料刊行会、昭55）。

井上敏幸・松尾和義編著「島津直伝西園和歌集」翻刻と解説（風間書房、平15）。井上敏幸編「鹿島膜島の政治と文化」（人間文化研究機構国文学研究資料館、平20）。

⑥ 杉山元明「江戸漫詩・影響と変容の系譜」（べりかん社、平15）。本書は木鼻に関する考を多く収めており、氏は木鼻門研究の必要性を喚起している。

付記資料の引用にあたっては全面にわたり、私に用いた句読点読み仮名などを施している。ただし、片仮名の読み仮名は原点読と仮名名などを施している。

本文は平成十八年六月、祐徳福徳神社において行われた国文学研究資料館主催の講演会「鹿島膜島の政治と文化」における講演の内容に、加筆訂正したものである。資料の閲覧、掲載を許可くださった、祐徳福徳神社祐徳博物館にお礼申し上げます。